

何度捕まっても

痴

加害者の告白

社会問題を「構造化」する
オンラインメディア

**Ridilover
Journal**

リディラバジャーナル

やめられなかった

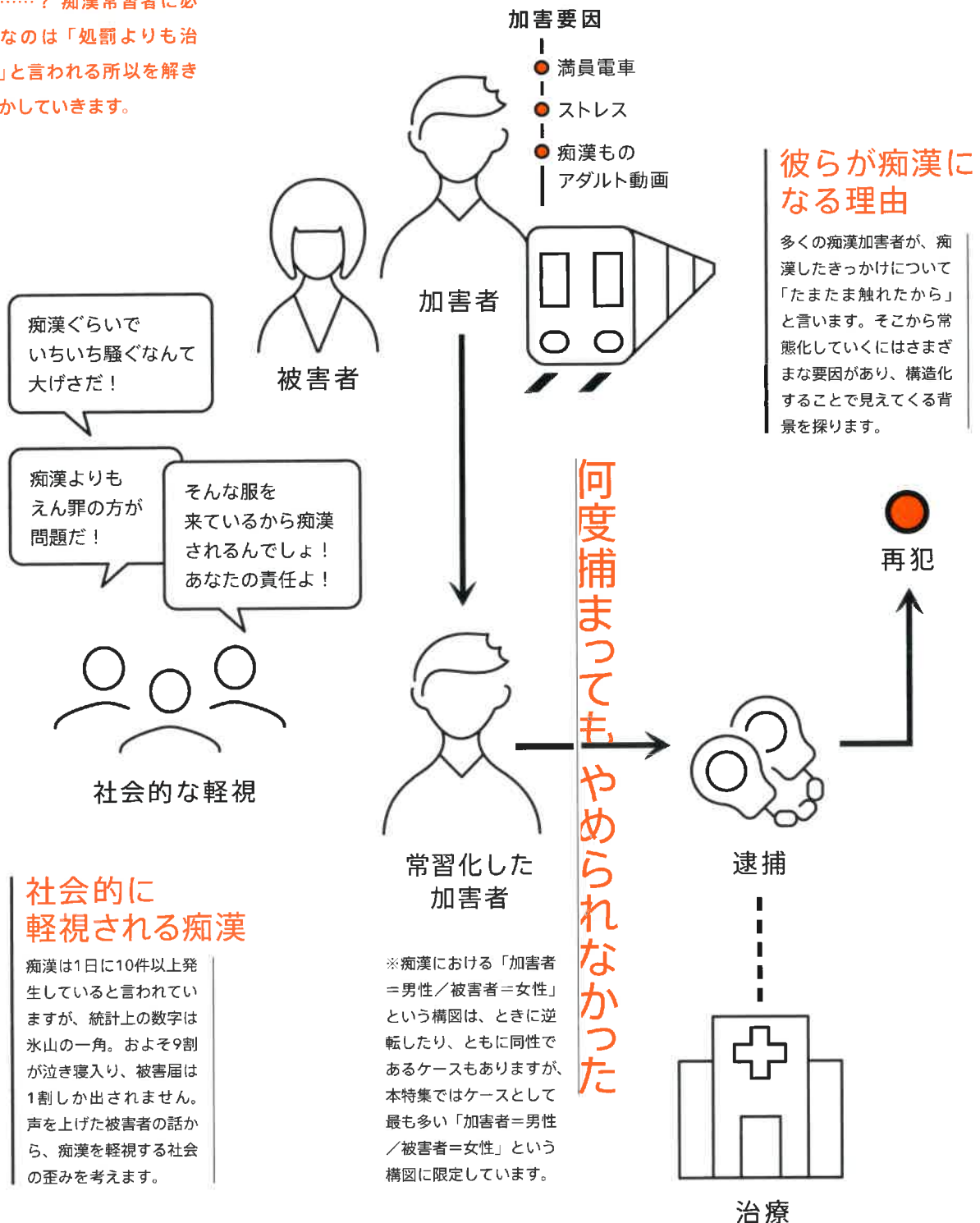
※この冊子には、痴漢の被害・加害に触れている箇所があります。フラッシュバックやPTSD（心理外傷後ストレス障害）を懸念される方は、十分注意するか、閲覧しないことをお勧めします。

リディラバ
ジャーナル
無料
試し読み

痴漢し続けて30年... 元加害者の告白

痴漢問題を「構造化」

痴漢という問題の構造とは……？痴漢常習者に必要なのは「処罰よりも治療」と言われる所以を解き明かしていきます。



彼らが痴漢になる理由

多くの痴漢加害者が、痴漢したきっかけについて「たまたま触れたから」と言います。そこから常態化していくにはさまざまな要因があり、構造化することで見えてくる背景を探ります。

社会的に軽視される痴漢

痴漢は1日に10件以上発生していると言われていますが、統計上の数字は氷山の一角。およそ9割が泣き寝入り、被害届は1割しか出されません。声を上げた被害者の話から、痴漢を軽視する社会の歪みを考えます。

※痴漢における「加害者＝男性／被害者＝女性」という構図は、ときに逆転したり、ともに同性であるケースもありますが、本特集ではケースとして最も多い「加害者＝男性／被害者＝女性」という構図に限定しています。

被害が頻発している痴漢問題の構造を紐解いていくと、そこには1人の加害者が数百、数千人もの被害者を生んでいる実態が見えてきます。痴漢問題を“解決する”ためには、被害者のケアと同時に、加害の要因を解消するアプローチが不可欠。そこで、リディラバジャーナルでは加害者や加害者の治療プログラムを実施する専門家にインタビューして“加害の闇”に迫り、痴漢問題の報道における新たな切り口を提示しました。本冊子では、痴漢加害者のインタビュー記事の一部抜粋をお送りします。

「両親は、最初に逮捕されて、身元引受人が必要になったときに、私の痴漢のことを知りました。痴漢をする人は複雑な家庭環境にあったと言われますが、うちはいたって普通。その日の夜中、母のすすり泣く声がずっと聞こえていました。それでも痴漢をやめることはできなかったんですが……」

大学生から痴漢をはじめ、その後30年もの間、痴漢行為を繰り返してきたと語る男性。逮捕されてもお、なぜ痴漢をやめられなかったのか、そしてどのように痴漢から脱することができたのか。

— これまでにどのくらいの人に痴漢という加害行為をされたのでしょうか。

通勤中、朝は1~2人、夜は5~6人とか。終電がなくなるまで往復したこともあれば、戻りの終電に乗れず、どこかに泊まって翌朝帰ってくることもありました。それから休みの日も痴漢をするために電車に乗っていました。30年も痴漢をしてきてしまったので、被害者は3万人はくだらないかもしれません。

— それだけの痴漢を繰り返していて、逮捕されることはなかったのでしょうか。

実は、何回も捕まっているんです。会社員になって最初の3年間はまったく捕まらなかったんですけど、26歳で初めて逮捕されて、それから1年に1、2回は捕まっていたんじゃないかな

いかと思います。

— そして実際に逮捕されても痴漢をやめるきっかけにはならなかったと。

私の場合は罰金刑が3回、刑務所には2回行って合わせると2年近く入所していました。刑務所は、最低限のルールさえ守ってれば、毎日ご飯が食べられるし、仕事もそこそこ言われたことだけやればいい。会社だったら一生懸命やらないといけないじゃないですか。出来が悪いと怒られたり、納期に間に合わないで徹夜し

たり。刑務所にいる間は、社会の中でどうやって生きていけばいいのかなんかも考えなくて済むので、ほとんど何のストレスもなかったです。服役している期間は痴漢をやめるための時間ではなく、出所までをただひたすら待つだけの時間でした。

— 刑務所の更生プログラムも意味がなかったのでしょうか。

私がいたのはもう10年前のことなので、今はどうなっているかはわからないのですが、当時はほとんど機能していませんでした。そもそも私は最長でも11カ月の服役で、その程度の刑期だと性犯罪のプログラムの多くが対象外でしたから。それに自分の中では、痴漢はやめようと思えばいつでもやめられると思っていました。30年痴漢をしてきて本当に何度も捕まりました



痴漢 加害者の告白

服役期間は出所までをただひたすら待つだけの時間でした

元痴漢加害者の自分だから こそできる何かがあるのかも

けど、それでもコントロールできると思っていて。ただ最後に捕まったとき、泥酔していたんですが、車両内の女性に見境なく触っていたら腕を掴まれてハッと気づいたんです。そのときに、自分が何をしていたかさっぱりわからなかった。いや、痴漢をしていたんですけど、そのときの自分は何で掴まれたのかもわからないような状態で。もう、これは駄目だなと思ったんです。

— それで、ようやく治療にもつながったと。

本当は最初の逮捕のときに性依存症のクリニックを紹介されて、3カ月ぐらいは毎日通っていました。ただ自分でどうにかなるだろうという気持ちもあり、「こちらは金を払っているんだから、医者なら治してみろ」という態度で、あまり治療に主体的じゃなかったんです。そうしたら、その後も何度も捕まってしまって……。最後の逮捕のときに、いよいよこれは本当に自

分ではどうにもできないと思いました。そして治療を続けて、ここ10年ぐらいは痴漢をやめられています。やめられているというか、正確にはさまざまな工夫して痴漢をしないような状況に自分を置いているんですが。

— というのは？

これまでに、痴漢できるような状況のまま自分をコントロールしようとして、何度も失敗しているんです。だからもう、電車には乗らないことにしよう。そう決めてからは、移動は車かバス。それで一応、痴漢はしなくなりました。できなくなったというべきなのかもしれないですけど。治療の初期の頃は、自転車通勤にして、電車に乗るとしても満員電車を避けるなどしていたんですけど、やはり難しかった。もしかしたら、どこかに痴漢を許してくれる人がいるのかもしれないと思ってしまって……。そうして10年が経ち、日常的に女性と接している中で、女性を見る目も変わってきまし

た。本当に少しずつですが、「痴漢をしない自分」にも近づいているかもしれないとは思っています。

— いまは痴漢をしていた当時の自分とどのように向き合っていますか。

たぶんこれを読んだ人の中には不快になる人もいると思うんですけど、なぜ自分は痴漢をしてしまったんだろうとか、どうしてやめられなかったんだろうと考えるんです。でも一人で考えていると、なかなかうまく言語化できない。だからクリニックをはじめ、話を聞いてもらうことで、自分がしてきたことと改めて向き合えればと思っています。私は現在、精神保健福祉士の資格を取っていて、元痴漢加害者の自分だからこそできる何かがあるのかもしれないんじゃないかと思っています。うまく言葉にできないんですが、かつての私のように、何千とか何万もの被害を生む痴漢加害者が1人でも減れば、それだけ救われる人もいるんじゃないかと……。

※本記事はリディアバジャーナルの特集「痴漢大国ニッポン、痴漢を“社会問題”として考える」の記事の一部を編集したものです。今回の男性のような痴漢加害者の実像や痴漢問題を取り巻く構造は、ぜひリディアバジャーナルに会員登録してご覧ください。



社会 問題の

リディラバジャーナルでは、これまで
30以上の社会問題について取り上げて

きました。なかでもメインで取り組んでいるのは、社会問題を「構造化」する記事制作です。構造化とは、問題を構成している要素の関係性を整理していくこと。また昨今は一つの問題が個別に生じているわけではなく、他の問題とつながってネットワーク化している時代です。そのため、一つの問題の構造を整理することで他の問題とのつながりも見えてきます。そうすると、当事者の「自己責任」ではなくて、問題が「社会のシステムの欠陥」から生じていることがわかります。リディラバジャーナルでは、そうした社会問題のネットワークを可視化していくことに取り組んでいます。どの課題解決に重点的に投資すれば、効率的に社会問題を解決することができるか。それを可視化するメディアとも言えます。社会問題に関するデータを集積して

いき、将来的には「読む」だけでなく、解決のために「アクションを起こす」ところまで伴走していけるようなプラットフォームにしていきたいと思っています。

ネットワークを可視化していく

社会問題を「構造化」する

s o c i a l
i s s u e
n e t w o r k

社会問題を構造として捉える視点が面白くユニークだなと感じた。このメディアが広がることで、世の中がどのように良くなるのかに興味がある。有料読者が記事をシェアすれば、登録していない人でも無料で読めるモデルを採用していることも面白い。リディラバジャーナルを活用して他人とも社会問題についてディスカッションするような機会があればいいと思う。

40代・会社員

知人に勧められて登録した。自分自身、ある社会問題の当事者であり、問題解決のためのアプローチとして加害者側に迫っている記事などが興味深かった。また、そのような情報が社会に発信されることに意味があると感じた。ただどちらかといえば、記事を読みたいというよりも、メディアとして応援したい気持ちのほうが強い。

30代・国際NGO所属

読んでみると、さまざまな社会問題は対処療法ではなく、根治療法が重要だということに気づかされる。自分も社会の様々な相互理解を促進したいと考えており、リディラバジャーナルの記事を使って意見を発信している。そういった意味では、インプットというよりもツールとして活用している。

20代・市民活動家

リディラバ
ジャーナル
購読者の声

社会問題はむずい。でも面白い。

「リディラバジャーナル」は社会問題の発信に特化した課金型オンラインメディアです。「社会の無関心の打破」を掲げて、さまざまな社会問題の背景にある社会構造まで踏み込み、特集形式で記事を平日毎日配信しています。

リディラバジャーナル
購読料金

月額 **980円**

年額 **9800円**



登録はこちら

